

経験16年の災害ボランティア 東日本大震災・七ヶ浜町での活躍

明日への
元気なリゾート

特定非営利活動法人レスキューストックヤード

愛知県名古屋市



災害ボランティア組織と聞けば、東日本大震災への対応のために組織されたグループのひとつかと思われがちだが、お話を伺った栗田暢之さんが代表理事を務める「レスキューストックヤード」は、1995年の阪神・淡路大震災をきっかけに学生の活動から始まった名古屋の災害ボランティア。これまで30件あまりにおよぶ各地の自然災害での活動実績を持ち、2002年3月には特定非営利活動団体になっている。復興への道のりが長期化すると予測される今回の震災では、息の長い活動に期待が寄せられる。



全国各地の被災地の長期継続支援から、今回の大規模災害に至るまでの的確・迅速に対応する本部スタッフ。

学生たちの純粋な気持ちに動かされた

東日本大震災から3ヶ月、名古屋のテレビ塔に近いレスキューストックヤードの事務所は「臨戦態勢」が解かれてない。ここはまだ震災の現地と繋がっている。取材中も何度か電話が入り、代表理事の栗田暢之さんはとても忙しそう。一度、震災現



支援物資の積み込み。的確な場所、タイミング、求められる品物、最適な量で届けなければ現地の負担になりかねないモノを送るにも神経を使う。

地に行かなくてはならないと取材予定が変更にならなかったが、「ぜひ、しっかり“防災”を知ってほしいんです」と、熱心にお話ししていただいた。

「そもそも、レスキューストックヤードの創設のきっかけは阪神・淡路大震災だったんです。当時、私は大学職員として、同朋大学の学生課の職員で、異動したばかりの頃でした」。その異動直後、1995年の1月17日に阪神・淡路大震災が起きた。栗田さん自身は名古屋にいたので、直接の被害はなかったが、ここで人生の転機が訪れる。「大学には社会福祉学部があり、その学生たちが鋭敏に反応したんです。被災地の障害者が二重の苦しみを受けていた。自分たちも何かしなくては! と」。

学生課の窓口を担当していた栗田さんも、意気に感じてすぐに動いた。現地を視察し、被災現地と隣接の大震災での学生の活動拠点を手配するなど、ほとんど現地につきっきりの生活がしばらく続く。

半年あたりが活動の転換点

そうこうするうち、3月に地下鉄サリン事件が起り、震災の話題がニュースから遠ざかる。なんとなく「まだ続けてるの?」という空気になり、大学の後押しがあったとはいえ、ボランティアの学生には経済的にも厳しい時期を迎える。

「現地にずっといれば、時間が経つにつれ、課題が個別化したり深刻化したりするが分かるんです。たとえば仮設住宅で、ふさざこんで人に会いたくないとか、朝から飲んだくれる、などさまざま。阪神では孤



レスキューストックヤードの代表理事を務める栗田暢之さん。全国各地の講演、防災イベントの企画などに飛び回る。「あの惨状に接したら誰でも人ごとに考えられない」。

独死も問題になりました。その時、最前线の神戸で、この先、どう関わるべきなのか、長く関わっていける仕組みにしていくにはどんな方法があるのか、と悩みました。それが、5・6月の頃。同じように、日本福祉大学や愛知県立大学の福祉学科の学生、また、社会人でもYMCA・YWCAなど震災を契機に立ちあがった団体もターニングポイントに差し掛っていました。

そこで、そういう人たちに呼びかけて、忘れちゃいけないことを語り、枠を超えて、市民団体としての「ボランティアネットの会」を作ることになったんです。震災半年後の7月でした。その会の事務局長に就任したところから私の市民活動の第一歩は始まりました。

七ヶ浜町を中心に経験をフルに活かす

以来16年。日本全国の台風、集中豪雨、地震、噴火被害など幾多の経験を経て、今、この「レスキューストックヤード」がある。そして、3月11日の東日本大震災。今回はどう取り組んでいったのだろう。

「宮城県の七ヶ浜町を中心に支援活動に入ってます。ここは、宮城県地震が99%来ると言われていたところ。防災意識が高

く、町の社会福祉協議会がレスキューの会員さんでした。それで、すぐに町の土地を提供して、日本財團の支援で各階60畳の2階建て「ボランティアさすな館」をプレハブで作りました。ここに今、常時40人ほどのボランティアが交代で泊まり込んで頑張っています。

陣容は、名古屋での専従スタッフが4人、アルバイトが4人、今回東日本大震災にあたり臨時に雇用したメンバーが3人、現地で雇用したのが2人。あとはボランティアで参加申し込みした人たち。

今回の震災では、「支援の手が入らない地域をつくらない」ことを前提に活動。また、地域を絞って、「鳥の目」発想ではなく「虫の目」発想で長期にわたって取り組む計画だ。これは、神戸での経験から学んだことである。実際、神戸の震災で関わったお年寄りとのご縁で、今もずっと若いボランティアたちが、おばあちゃんと孫の付き合いをしているケースもあるくらいだ。

現場発想をすぐ活動に! の機動力

七ヶ浜町での活動は…残った建物1階部分や私有地、路地など生活道路でのヘドロ除去作業がまずひとつ(公道は行政が担当)。それから、有名な海水浴スポット菖蒲田浜の浄化作業。ここには、仙台港から流れ着いたコンテナまで含め膨大な量のがれきがある。地道な人海戦術だ。

他には、きずな館1階の喫茶コーナーやキッズコーナーの運営も、文字どおり人どうしの絆を深めるのに大いに役立っている。中でも人気なのは、足湯。足だけお湯に浸かってもらい、手指もマッサージする。「この触れあいか心を開いて、避難所生活での本音を皆さんよく話すんです。それが



心の癒しにもなりますから」と、栗田さん。

活動の始まりが学生たちの発案からだっただけに、自分たちで考案したアイデアや、被災現地での声を即座に行動に移す柔軟さ・自主性・機動力がレスキューストックヤードならではの持ち味になっている。

日常のコミュニティ活動が大切

もちろん、レスキューストックヤードの活動は、災害時だけではない。実は、普段の「防災」活動が、復興支援活動と同じように、とても重要なことだと栗田さんは言う。「災害はいつかは必ず遭遇する。だから、普段の生活の中で、楽しく取り組める方法を考えるんです。例えば、地域の運動会での手作り担架リレー、バケツリレー、大声コンテスト、公園などを利用しての模擬サバイバルイベントなど。これらは必ず災害時に生きて役立つ工夫なんですよ。栗田さんは、人には仲間と一緒に何かに取り組む喜びと、誰かのために役に立てるという喜びの2つがあると言う。

人と人との繋がりが復興の力になる。それは今、七ヶ浜町の活動で実証され、経験値として着実に“ストック”されている。



各地区の他の組織の情報がポストイット(糊付き付箋)でそのつど更新されて行く。こうして地図を見ると被災範囲は広い。頑張ろう! “震つな”。

みんなに大好評の「足湯」。向き合って指のマッサージをするうちに、罹災された方はいろんなことを話してくれる。こうした対話の中からボランティア活動のアイデアを汲み取ることも。

「ボランティアさすな館」で常連のお婆ちゃんを囲んで談笑のひととき。「戦争も地震もそのたびになんとか乗り越えてきたから、きっと今度もたのむよ。最近やっとみんなにも笑顔が戻りつつある。」